

大学教育における南アジアフィールド教育の意義と可能性 ～宮城学院女子大学と神戸女学院大学における実践から～

神戸女学院大学文学部英文学科准教授

南出 和余

『女性学評論』の活性化を図るため、本36号ではテーマに基づく「特集論文」を設けることとなった。年度の早い時期に女性学インスティテュート主催の定例研究会を開催し、そこでの発表と議論を踏まえて論文にする。企画者は女性学インスティテュートメンバーが担うが、発表者はテーマに応じて学内外から招へいする。36号に向けての定例研究会および特集論文は南出が企画し、大学教育における南アジアでのフィールド教育をテーマに、宮城学院女子大学学芸学部人間文化学科教授の八木祐子先生（文化人類学）と、神戸女学院大学文学部総合文化学科教授の北川将之先生（政治学）、加えて同大学学部英文学科准教授の南出（文化人類学）が、それぞれ南アジアでの教育実践を共有し議論することとした。3名の執筆者は日本南アジア学会等での研究活動を通して交流があり、それぞれが学生を南アジアに引率してフィールド教育を行なっていることを知っていた。また宮城学院女子大学と神戸女学院大学は互いにキリスト教主義の女子大学として連携しており、大学間での特別聴講制度（国内留学）も展開している。そのような背景から、女子高等教育における南アジアを舞台としたフィールド教育の意義と可能性を共に考えることを、本特集のテーマとした。

現在、日本を含む多くの先進諸国で高等教育が大衆化（学齢人口に対する高等教育就学率が50%を上回る状況に達）し、高等教育には専門家の養成だけでなく、加速化するグローバル化と社会変動を生き抜く市民力の養成が期待されるようになっている。そうしたなかで、1991年にアメリカの高等教育機関で提唱された「アクティブラーニング」（Bonwell & Eison, 1991）が、日本の大学

にもやや遅れたかたちで導入された。なかでも教室を出て実施される「海外体験型学習」は、既存のいわゆる海外留学とは異なるかたちで、実社会のさまざまな課題を直に感じとり、自ら課題解決策を見出そうとする実践学習として、多くの大学で導入されている。海外体験型学習の行き先には往々にして発展途上国、日本からはとくに東南・南アジア諸国が選ばれ、開発教育の要素を多く含む。

日本の大学における海外体験型学習は、早くは1980年代後半頃から、主にキリスト教系大学での「サービ斯拉ーニング」によって先導されてきた。その理由を、大学での海外体験学習について総括的な検討を進める子島・藤原(2017:5)は、「大学で学んだ知識をコミュニティでのサービス(奉仕活動)において生かし、両者を統合する点に、アクティブラーニングを重視する『海外研修』との共通点がある」と述べている。このことは、本特集で執筆者たちが教育を展開する両大学にも共通している。19世紀末にアメリカから日本にやってきたキリスト教宣教師たちによる女学校創設の機運のなか開設された両大学は、ともに建学の精神に、現代のサービ斯拉ーニングにつながる気質をもっている。宮城学院女子大学のモットーは「神を畏れ、隣人を愛する」であり、神戸女学院大学では「愛神愛隣」を永久標語としている。社会の変化とともに「愛隣」を体現する行動は変化しているが、国際社会のなかで他者と自らを尊重する女性の育成という理念は、時代を貫いて教育に反映されている。女子の教育機会が極めて限られていた19世紀末の日本でも、50%の女子が大学に進学するようになった現代でも、両大学における教育は、個々の学生の人格養成に焦点が当てられている。

本特集3本の実践論文には、南アジアでのフィールド教育を通じて何を伝えるか、また学生たちは何を学んできたかが集約されている。共通して読み取れるのは、上記に述べた、個々の学生たちの人格形成やグローバル社会を生き抜く力の養成という側面である。そして、南アジア社会(インドとバングラデシュ)は、その現代的变化をもって、学生たちが試行錯誤するのに適したフィールドであることが分かる。

1994年から6度にわたってインドでフィールド実習を実施してきた八木は、学生たちが自分の体感を使ってインドの社会や文化を知る経験の重要性を主張し、フィールドワークは「現地での判断力や行動力が養われ、自主性を育て、異文化への適応能力、コミュニケーション能力、協調性も自然と身につく」という。実習では事前に学生たちが調査するテーマを決めて、現地でアンケート調査をすることになっているが、20年の間に学生たちが設定するテーマに明らかな変化が見られると分析している。この変化は先輩から後輩へと引き継がれるなかで成熟したものであると同時に、インド社会そのものの変化を示している。最初はインドを異文化と捉えた異文化理解が主だったのに対して、最近ではインドの人びとの健康観（ファストフードを含む食）などといった、グローバル化の影響下でのインド社会がテーマとなっている。特筆すべきは、インドで他者と自分に向き合った経験が、多様なかたちで学生のその後の人生に影響を及ぼしていることである。人類学者となった者も複数おり、あるいはインドで就職したりインドの人と結婚したりと、固定概念にとらわれない自分らしい生き方を築こうとする女性たちの姿である。

次に、2010年度から2019年度まで毎年、計10回にわたって「インド・フィールドワーク」の授業を展開してきた北川は、学科カリキュラムのなかでのフィールド教育の位置づけを検討し、講義科目やゼミ、卒業論文研究との有意義な連携のあり方を議論している。リベラルアーツを教育理念に掲げる神戸女学院大学において、インドという具体的な社会での経験的学びが、学生たちの感受性や「複眼的思考の涵養」にいかにか寄与しうるかを目指している。そのために、開始当初から3年間は北川が担当する国際関係論ゼミの一環として実施していた実習を、2013年度からはプロジェクト科目として2年次から履修できるようにした。興味深いのは、回を重ねるごとに、インドでのフィールドワーク実習を経験した学生がその後取り組む卒論のテーマが、必ずしもインドに関連したものに限定されなくなっていることである。この変化を北川は、学生たちが「現代インドについて理解するという方向から、インドと他国を比較して（グローバル社会を）考えるという方向にシフトしてきた」と見ている。

フィールド教育の方法において八木と北川に共通してみられるのは、現地大学とのコラボである。八木は、学生たちが現地でアンケート調査をする際に、ジャワハルール・ネルー大学（JNU）やバナーラス・ヒンドゥー大学（BHU）で日本語を学ぶ学生たちに各グループの調査に協力してもらっている。北川も、学生たちが現地の各機関を訪問する際や街歩きをする際に、提携校であるセント・ジョセフ大学の学生たちと行動を共にしている。現地でフィールドワークをするうえでの言語の壁を乗り越えるうえで有効だけでなく、インドの同世代の大学生たちとの交流やディスカッションから学生たちが受ける影響や気づき、またその実感は大きいものと思われる。

八木と北川の長年の経験に対して、南出の事例は1度きりのものであるが、同じ南アジア内でもバングラデシュという、かつては「開発の実験場」とさえ呼ばれていた国際協力のアリーナでのフィールド教育の意義は、インドと若干異なるところがある。「発展途上国」や「貧困」のイメージが強いバングラデシュに赴くことで、自らの中にある先入観をまず問い直すことが求められる。また、八木の事例にも示されていたが、インドやバングラデシュの社会変動のなかで、バングラデシュの国際社会との関係のあり方も確実に変わっている。これまでは国際開発協力のもとで国内外 NGO が主導となって展開してきたバングラデシュをフィールドとする海外体験型学習も、その持ち方を見直す時期が来ているように思う。さらに南出の事例では、フィールド教育の方法として映像制作を用いる可能性についても議論している。

以上のように、本特集の3本の論文では、南アジアのなかのインドとバングラデシュというフィールドを舞台にしつつ、学生たちに提供される教育は、インドやバングラデシュに限定されないグローバル社会への誘いであり、さらにはそこでの学びを広げる応用力である。そのことが、一部においては専門家を養成しながら、全体として個々の学生の人格育成に繋がっており、両女子大学の目指すところにあることを示しているといえよう。

参考文献

Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). *Active Learning: Creating Excitement in the Classroom*. ASHE-ERIC Higher Education Report, Washington DC: School of Education and Human Development, George Washington University.

子島進、藤原孝章 編 (2017) 『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版。

